

26年センター試験「基幹3教科」平均点合計(600点満点)

「国語+数学(I・A+II・B)+英語」は、 8.0点アップの336.3点(得点率56.1%)!

国語の平均点-2.4点で、「共通1次試験」含め初の50%割れ。

数学I・A+10.9点、英語+1.1点、数学II・B-1.7点。

地歴(B科目)・「倫政経」・化学Iアップ/現社・生物I・物理Iダウン。

旺文社 教育情報センター 26年2月

26年センター試験は志願者56万672人(前年比2.2%減)、受験者53万2,350人(同2.0%減)で、ともに2年ぶりの減少である。

大学入試センターからこのほど発表された実施結果によると、国公立大の文系・理系に共通の「国語、数学(2科目)、英語」の「基幹3教科」の平均点合計(600点満点)は、25年より8.0点アップの336.3点(得点率56.1%)だった。過去のデータも含め、センター試験の実施結果を様々な角度から分析し、以下にビジュアルデータとしてまとめた。

■基幹3教科の平均点合計

◎ 24年センター試験(以下、セ試)から地歴、公民、理科における試験枠の変更に伴い、各科目の得点には「第1解答」と「第2解答」(後述)の得点が混在し、各科目の平均点の実態が従前に比べ把握しにくい。そのため、平均点の動向をみる一つの視点として、国公立大の文系・理系に共通の「基幹3教科」である国語、数学、英語の平均点合計を算出。

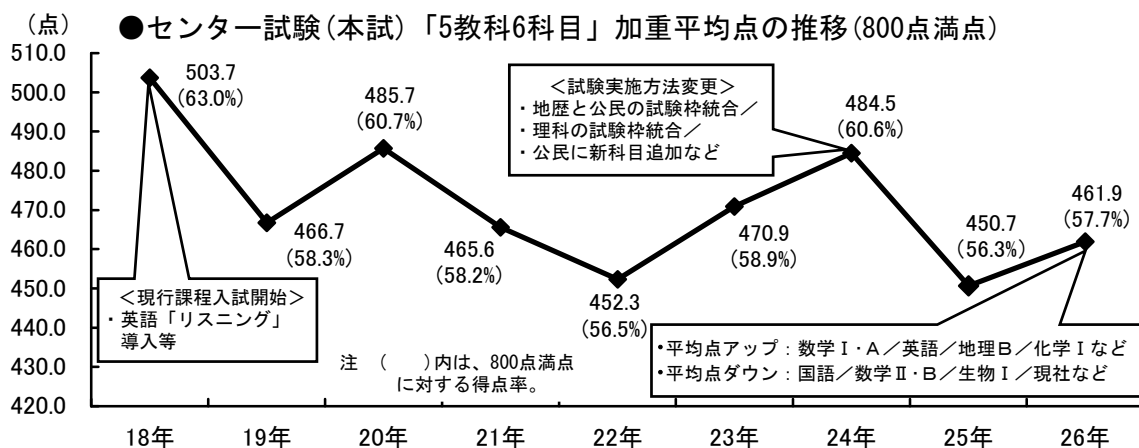
大学入試センターから発表された科目別平均点等の「確定値」を基に算出した「基幹3教科」平均点合計(600点満点)は、次のとおりである。

国語+数学(数学I・A+数学II・B)+英語 = 336.3点(前年差:+8.0点。得点率56.1%)

■「5教科6科目」の加重平均点

◎ 国公立大受験の文・理系型共通の「5教科6科目」の各加重平均点の合計を算出。

「5教科6科目」加重平均点(800点満点)=461.9点(前年差:+11.3点。得点率57.7%)



注. 大学入試センター発表の各科目別平均点と受験者数から算出。国語(200点満点)の平均点、及び地歴と公民を合せて1教科・1科目とした加重平均点(100点満点)、数学①の加重平均点(100点満点)、数学②の加重平均点(100点満点)、理科の加重平均点(100点満点)、外国語の加重平均点(200点満点)を合計(800点満点)。18年は理科の新課程(現行課程)出題に伴う「経過措置」科目(旧課程科目)含む。

平成26年度 大学入試センター試験(本試験) 平均点等一覧[確定]

<平成26年2月6日 大学入試センター発表>

教科	科目	平成26年(確定)		平成25年(確定)		平均点 対前年差	受験者数 対前年差	
		受験者数	平均点	受験者数	平均点			
基幹3教科 平均点合計(600点満点) 【国語+数学Ⅰ・A+数学Ⅱ・B+英語(200点換算)】		- (得点率)	336.3 56.1%	- (得点率)	328.4 54.7%	8.0 (点)	- (人)	
国語(200点)	国語	503,587	98.7	516,153	101.0	▲ 2.4	▲ 12,566	
地理歴史・公民	地理歴史(100点)	世界史A	1,422	47.8	1,491	46.7	1.1	▲ 69
		世界史B	85,943	68.4	90,071	62.4	6.0	▲ 4,128
		日本史A	2,612	47.7	2,651	41.6	6.1	▲ 39
		日本史B	153,204	66.3	159,582	62.1	4.2	▲ 6,378
		地理A	2,028	51.8	2,253	50.1	1.7	▲ 225
		地理B	146,472	69.7	143,233	61.9	7.8	3,239
	公民(100点)	現代社会	77,825	58.3	83,471	60.5	▲ 2.1	▲ 5,646
		倫理	33,761	60.9	36,151	58.8	2.0	▲ 2,390
		政治・経済	48,363	53.9	51,888	55.5	▲ 1.6	▲ 3,525
		倫理、政治・経済	48,789	67.3	53,295	60.7	6.6	▲ 4,506
数学	数学①(100点)	数学Ⅰ	7,187	39.7	8,135	40.8	▲ 1.2	▲ 948
		数学Ⅰ・数学A	391,273	62.1	398,447	51.2	10.9	▲ 7,174
	数学②(100点)	数学Ⅱ	6,333	32.8	6,970	26.2	6.6	▲ 637
		数学Ⅱ・数学B	355,423	53.9	359,486	55.6	▲ 1.7	▲ 4,063
		工業数理基礎	33	60.9	25	33.4	27.5	8
		簿記・会計	1,249	62.5	1,208	38.4	24.1	41
	情報関係基礎	482	63.3	608	57.3	6.0	▲ 126	
理科(100点)	理科総合A	9,172	48.2	12,805	44.8	3.5	▲ 3,633	
	理科総合B	13,926	53.4	17,310	54.4	▲ 1.0	▲ 3,384	
	物理Ⅰ	160,823	61.6	159,644	62.7	▲ 1.1	1,179	
	化学Ⅰ	233,632	69.4	231,945	63.7	5.8	1,687	
	生物Ⅰ	188,400	53.3	195,815	61.3	▲ 8.1	▲ 7,415	
	地学Ⅰ	17,668	50.2	17,853	68.7	▲ 18.5	▲ 185	
外国語(200点)	英語	筆記(200点)	525,217	118.9	535,835	119.2	▲ 0.3	▲ 10,618
		リスニング(50点)	519,172	33.2	529,440	31.5	1.7	▲ 10,268
		筆+リ(200点換算)	-	121.6	-	120.5	1.1	-
		ドイツ語	147	155.4	123	151.5	3.8	24
		フランス語	134	155.7	151	150.6	5.1	▲ 17
		中国語	449	148.1	445	159.3	▲ 11.2	4
		韓国語	161	144.8	180	140.3	4.5	▲ 19

<注>

- ① 英語の平均点(200点)は、「筆記」(200点)＋「リスニング」(50点)の250点満点を200点に圧縮換算。
- ② 大学入試センター発表の科目別平均点は小数第2位の表示だが、旺文社では小数第1位で表示。
- ③ 表中の「平均点対前年差」は、四捨五入の関係で「26年-25年」と一致しない場合もある。
▲印は「ダウン」(平均点)、および「減」(受験者数)を示す。
- ④ 地歴(各B科目間)、公民(「倫理、政治・経済」除く、各科目間)、理科(各I科目間)における得点調整は、「化学Ⅰ」-「地学Ⅰ」の19.2点が最大で、実施されなかった。

旺文社 教育情報センター(平成26年2月6日)

主な科目の平均点アップ・ダウン

<平均点アップの主な科目>

数学Ⅰ・A(+10.9点)／地理B(+7.8点)／「倫理、政治・経済」(+6.6点)／世界史B(+6.0点)／化学Ⅰ(+5.8点)／倫理(+2.0点)／英語(+1.1点<筆記+リスニング>：「筆記」-0.3点、「リスニング」+1.7点)など。

<平均点ダウンの主な科目>

地学Ⅰ(-18.5点)／生物Ⅰ(-8.1点)／国語(-2.4点)／現代社会(-2.1点)／数学Ⅱ・B(-1.7点)／政治・経済(-1.6点)／物理Ⅰ(-1.1点)など。

注。()内の数値は平均点の対前年差。

■英語;筆記-0.3点、リスニング+1.7点で、「筆記+リスニング」は1.1点アップ!

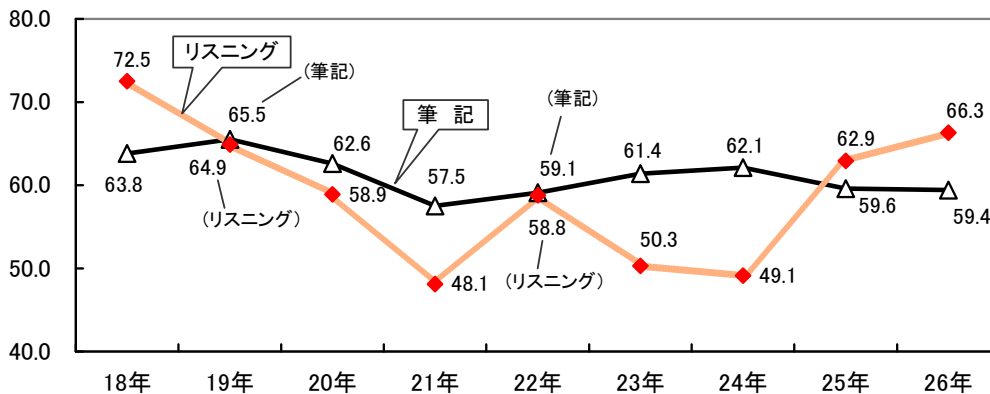
◎ 26年の英語の平均点は筆記が0.3点ダウン、リスニングが1.7点アップし、全体(筆記+リスニング:250点満点を200点満点に圧縮換算)では1.1点アップの121.6点だった。

平成2(1990)年のセ試開始から26年までの英語の平均点(2年~17年までは筆記のみ、18年以降は筆記+リスニング)の推移をみると、6年にこれまで最低の96.4点(得点率48.2%)を記録した後、V字回復を果たし、得点率はほぼ5割台半ば~6割台半ばを推移している。最近は、22年118.0点(得点率59.0%)→23年118.4点(同59.2%)→24年119.0点(同59.5%)→25年120.5点(同60.2%)→26年121.6点(同60.8%)と、上昇傾向にある。

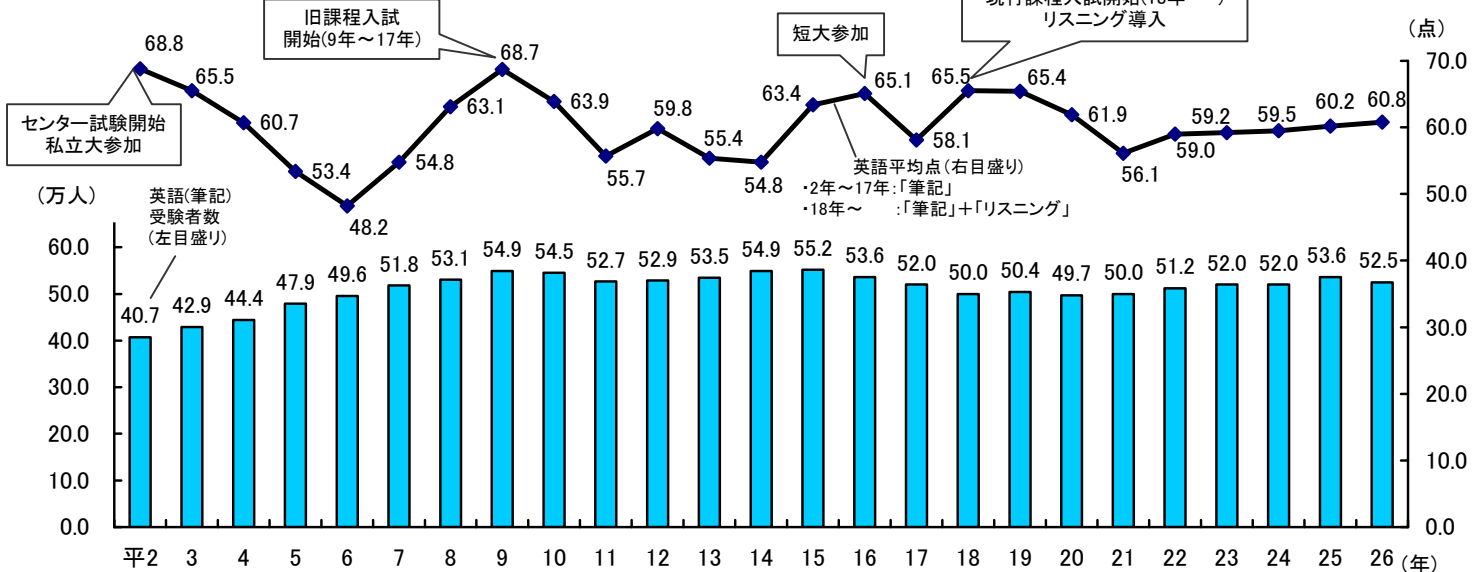
◎ 最近の筆記は、21年に115.0点(200点満点、得点率57.5%)と6割を割った後、22年118.1点(同59.1%)から24年124.2点(同62.1%)まで上昇傾向にあったが、25年119.2点(同59.6%)→26年118.9点(同59.4%)と、2年連続ダウンした。

一方、リスニングは、18年の導入時に平均点36.3点(50点満点、得点率72.5%)の高得点を示した後、19年32.5点(同64.9%)→20年29.5点(同58.9%)→21年24.0点(同48.1%)と、3年連続ダウン。22年は上昇(29.4点、得点率58.8%)したが、23年(25.2点、同50.3%)→24年(24.6点、同49.1%)と2年連続ダウン。25年(31.5点、同62.9%)は3年ぶりの上昇に転じ、26年(33.2点、同66.3%)は初回の18年に次ぐ高得点であった。

(得点率:%) ●英語:「筆記」&「リスニング」の得点率の推移



●英語の平均点・受験者数の推移



注. ① 折れ線グラフは、平成2年~17年における「筆記」(200点満点を100点満点に換算)の平均点、18年以降における「筆記」(200点満点)+「リスニング」(50点満点)の平均点(250点満点を100点満点に圧縮換算)を表示。 ② 棒グラフは、「筆記」の受験者数を表示。

■国語；平均点、「共通1次試験」含め初の“50%割れ”、過去最低！

◎ 例年、セ試では英語に次いで受験者の多い国語(26年本試験の国語受験者数:50万3,587人)について、前回の旧課程入試の始まった9年から26年までの平均点と受験者数、及び共通1次試験も含めた得点率の推移を下図に示した。

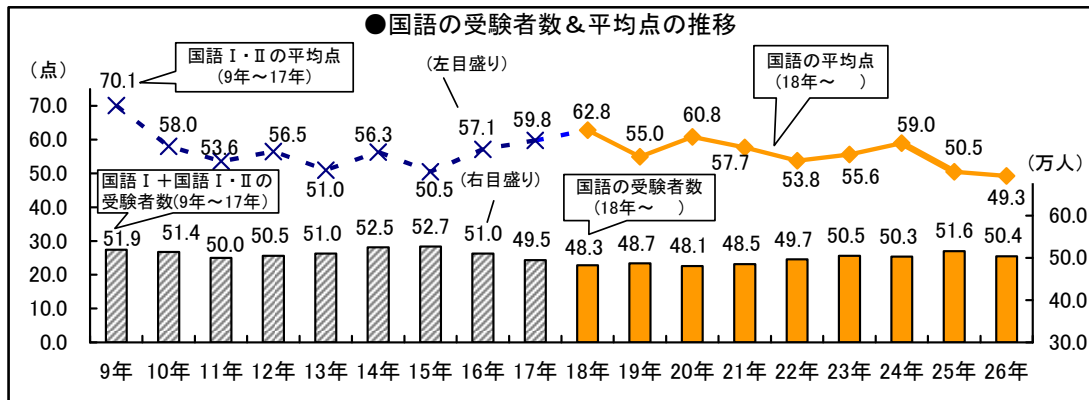
◎ 9年の国語Ⅰ・Ⅱ(9年～17年までの旧課程時の国語の出題は、国語Ⅰと国語Ⅰ・Ⅱの2科目。受験者数は圧倒的に国語Ⅰ<国語Ⅰ・Ⅱ)の平均点は70.1点(200点満点を100点満点に換算。以下、同)と高得点であったが、10年には58.0点と大幅にダウン。その後は旧課程入試最終の17年まで、50点台のアップ・ダウンを繰り返し、15年には50.5点の低得点を記録。

最近では得点率を6割直前まで回復していたが、25年は現代文の難化で、それまでの最低点(15年の50.5点より若干低い。平均点の四捨五入の関係で小数点第2位に差異)となった。

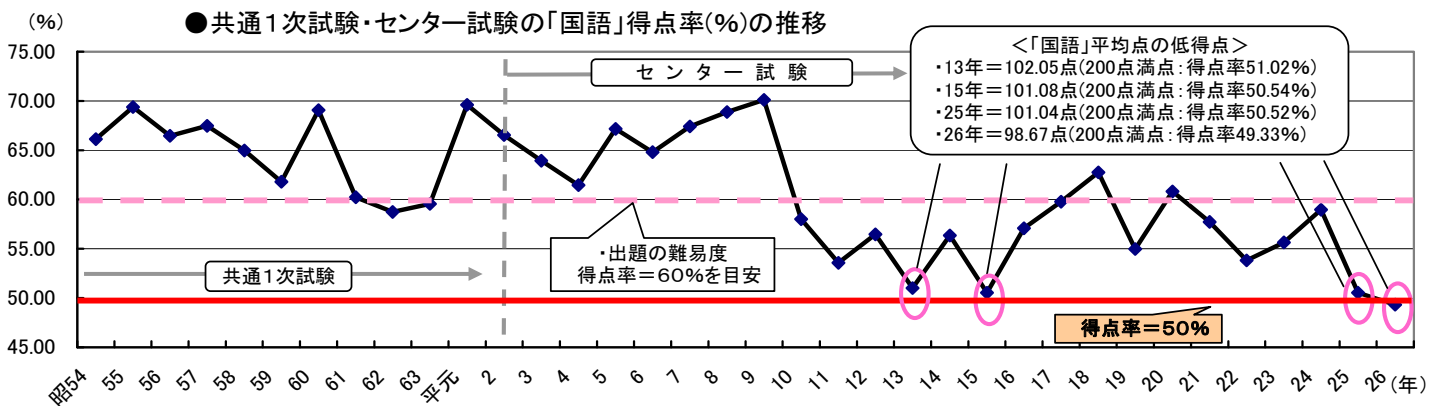
◎ 26年は、古文(本試験では初出題の『源氏物語』)の難化などで平均点は49.3点。共通1次試験(昭和54<1979>年～平成元年<1989>年:11回実施)とセ試(平成2年～:25回実施)を通して初めて平均点が50%を割り、過去最低となった。

◎ 国語の得点率は、概して「共通1次」時代と「セ試」時代の前半(平成9年まで)はほぼ60%以上(昭和62・63年はわずかに60%割れ)の高得点率、それ以降は、現行課程入試開始(18年～)当初はやや高かったが、ほぼ50%台半ば～後半で推移。しかし、25・26年は急落。

因みに、「共通1次」時代における国語の得点率の平均は60%台半ばで、得点率60%未満の試験は11回中、2回のみである。一方、「セ試」時代の国語の得点率の平均は60%未満で、得点率が60%未満だった試験は25回中、15回に及ぶ。



注1. 旧課程入試(9年～17年)は、国語Ⅰ及び国語Ⅰ・Ⅱの2科目出題。新課程(現行課程)入試(18年～)では、国語1科目のみの出題。 2. 200点満点を100点満点に換算。



注① 「国語」平均点の得点率を示す。 ② 昭和54(1979)年～平成元年(1989)年は「共通1次試験」、2年以降は「センター試験」。
③ 9年～17年の旧課程入試では、「国語Ⅰ」「国語Ⅰ・国語Ⅱ」の2科目出題。ここでは、「国語Ⅰ・国語Ⅱ」の得点率を示す。

■**数学**; 数学Ⅰ・Aは+10.9点の大幅アップで6割台。数学Ⅱ・Bは-1.7点で5割台!

◎ 数学は国公立大志願者にとって、文系志望者も含め必須教科だ。中でも数学Ⅰ・Aと数学Ⅱ・Bは英語、国語に次いで35万人を超える受験者を擁し、文・理系型の基幹科目である。

セ試開始(2年)以降、26年までの25回に及ぶ数学Ⅰ・A(2年～8年までは旧・数学Ⅰ)と、数学Ⅱ・B(2年～8年までは旧・数学Ⅱ)との平均点の推移を下図に示した。

◎ 数学Ⅰ・A(旧・数学Ⅰ含む。以下、同)のこれまでの最低点は22年の49.0点で、セ試開始以降初めて5割を割った。最高点は12年の73.7点で、最高点と最低点との較差は24.7点。

一方、数学Ⅱ・B(旧・数学Ⅱを含む。以下、同)の最低点は10年の41.4点、最高点は6年の77.2点で、その較差は35.8点である。

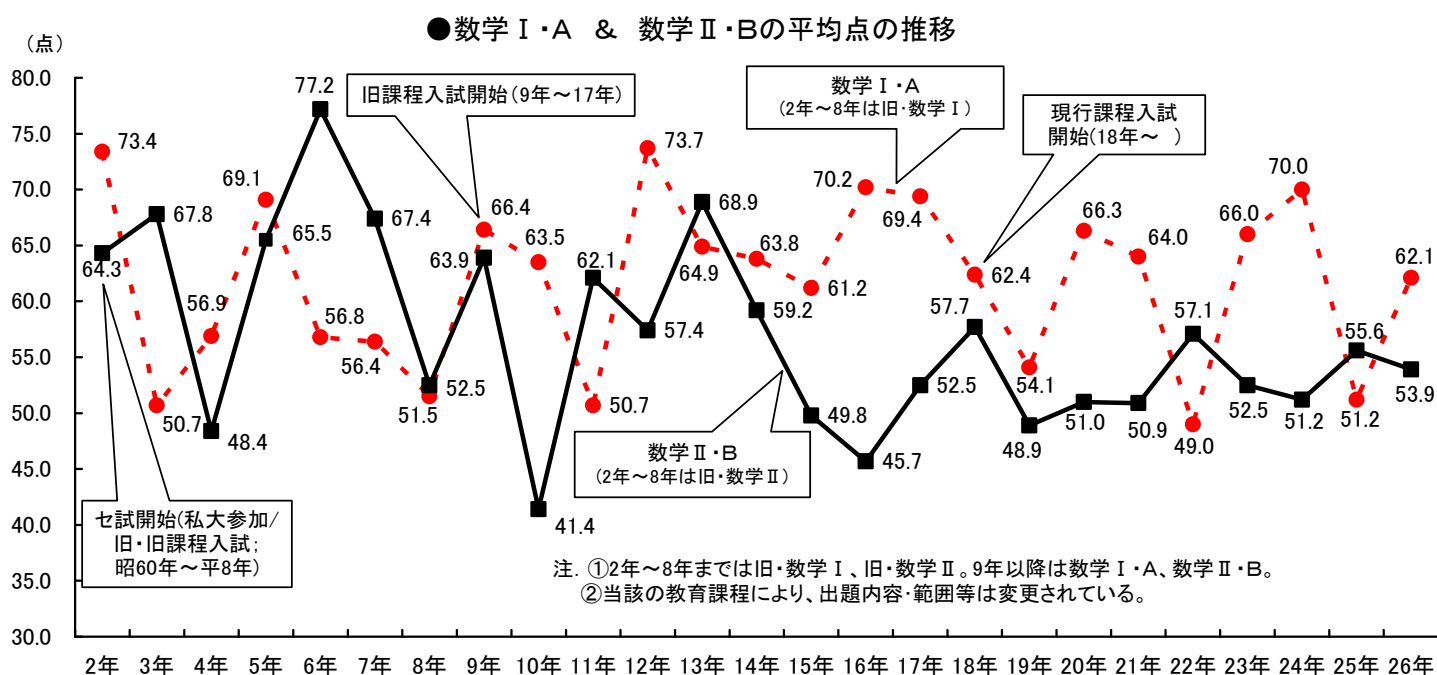
◎ 数学Ⅱ・Bの平均点は26年も含め、過去25回の試験(本試験)で50点未満が5回もあって変動幅も大きいのに対し、数学Ⅰ・Aの平均点50点未満は22年の1回のみである。

数学Ⅱ・Bは出題範囲が広く、応用問題も出題しやすいため、数学Ⅰ・Aに比べ、難易や問題量などによって不安定な平均点を示していると思われる。

◎ 最近の数学Ⅰ・Aの平均点は、22年にこれまで唯一の50点割れとなった49.0点まで急落し、13年以来9年ぶりに数学Ⅱ・Bを8.1点下回った。その後、23年・24年と2年連続上昇して数学Ⅱ・Bを上回った。25年は18.8点の大幅ダウンで数学Ⅱ・Bを下回ったが、26年は10.9点の大幅アップ(得点62.1点)で再び数学Ⅱ・Bを上回った。

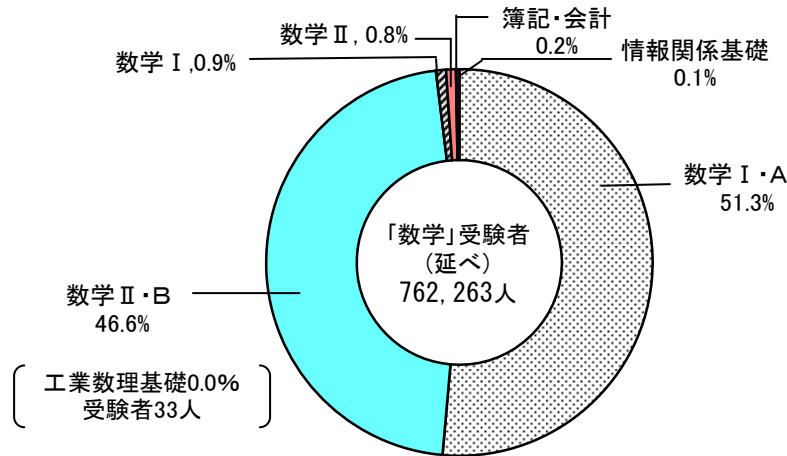
一方、数学Ⅱ・Bは、22年に57.1点で数学Ⅰ・Aを8.1点上回ったものの、23年52.5点→24年51.2点と2年連続ダウンした。25年は3年ぶりに上昇して数学Ⅰ・Aを上回ったが、26年は1.7点ダウンの53.9点で再び数学Ⅰ・Aを下回った。

その結果、数学Ⅰ・Aと数学Ⅱ・Bの平均点差は、25年4.4点差(数学Ⅰ・A<数学Ⅱ・B)→26年8.1点差(数学Ⅰ・A>数学Ⅱ・B)と拡大し、高得点科目も入れ替わった。

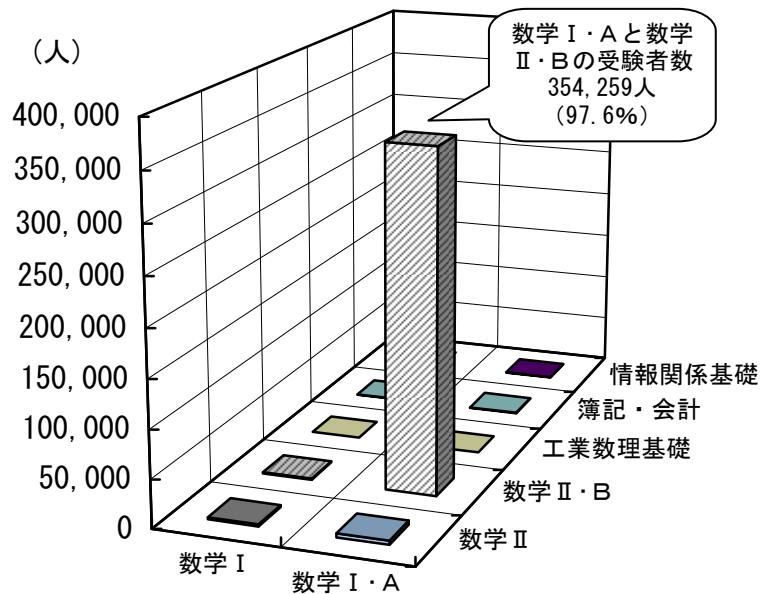


□数学2科目受験は、「数学I・A + 数学II・B」で約35万4,000人(2科目受験者の97.6%)

●「数学」延べ受験者の構成比（追・再試験含む）



●数学2科目受験者の内訳（追・再試験含む）



●「数学」2科目受験者：362,965人の内訳

数 学	①	数 学 ②				
		数学II (人)	数学II・B (人)	工業数理基礎 (人)	簿記・会計 (人)	情報関係基礎 (人)
	数学I	2,175 (0.6%)	1,233 (0.3%)	6 (0.0%)	290 (0.1%)	82 (0.0%)
	数学I・A	4,135 (1.1%)	354,259 (97.6%)	27 (0.0%)	422 (0.1%)	336 (0.1%)

注. ()内は、「数学」2科目受験者に占める割合。

■ **地歴・公民**：「地歴」全6科目で“平均点アップ”。「公民」は倫政経と倫理がアップ！
「公民」選択率 38.6%で、受験者数“大幅減”！

□ **地歴と公民の受験者動向等**

◎ **試験枠の統合**

24年セ試から地歴と公民の試験枠が統合され、さらに公民に4単位科目の「倫理、政治・経済」（以下、倫政経）が新設された。これにより、[地歴、公民]（〔 〕は試験枠を示す。以下、同）の10科目から最大2科目の選択が可能となった。

ただし、日本史Aと日本史Bなど、同一名称を含む科目同士の組合せ、選択はできない。

◎ **地歴の受験者約7,000人(1.8%)減、公民は約1万5,000人(6.9%)の大幅減！**

セ試の全受験者数(53万2,350人。追・再試験含む)が25年より2.0%減少した中、地歴の実受験者数(追・再試験含む)は、25年より6,957人(前年比1.8%)減の37万5,266人だった。全受験者数に占める「教科選択率」は25年より0.1ポイント上昇の70.5%である。

他方、公民の受験者数は、25年より1万5,204人(同6.9%)減の20万5,461人だった。各教科の受験者数の減少率は2%前後だが、公民の約7%減は突出している。また、公民の「教科選択率」も25年の40.6%から38.6%に低下し、地歴の半分程度である。

地歴と公民の延べ受験者数は、25年より2万3,552人(前年比3.8%)減の60万767人。

◎ **「地歴」「公民」各科目受験者軒並み減少の中、地理Bのみ2.3%増の約14万6,000人**

地歴と公民の各科目受験者数(本試験)は軒並み減少し、地理Bのみが25年より3,239人(前年比2.3%)増加した。特に公民は、倫政経の8.5%減を最高に、各科目とも6%台後半の大幅な減少である。因みに、地歴では世界史Bが4.6%減、日本史Bが4.0%減である。

◎ **「公民」受験の大幅減、「地理B」増加の要因**

上記のような「公民」受験減少と地理B増加の要因としては、国公立大の理系志望者にとって従前のような所謂「公民保険」（地歴と公民2科目受験の場合、高得点科目を利用：後述）の効用がなくなったこと、国立大を中心にした「第1解答科目」（後述）の成績利用によって、より広範な出願が可能な地歴の地理Bなどを“本命”科目(第1解答科目)とする理系志望者が増加していることなどが挙げられる。

◎ **平均点は「地歴」全6科目、「公民」の倫政経、倫理でアップ**

地歴の平均点は、地理B+7.8点(得点69.7点)、世界史B+6.0点(同68.4点)、日本史B+4.2点(同66.3点)など、A科目も含め6科目すべてがアップした。公民は、倫政経が+6.6点(同67.3点)、倫理が+2.0点(同60.9点)であったが、公民では受験者の最も多い現代社会(本試験受験者数：7万7,825人)は-2.1点(同58.3点)だった。

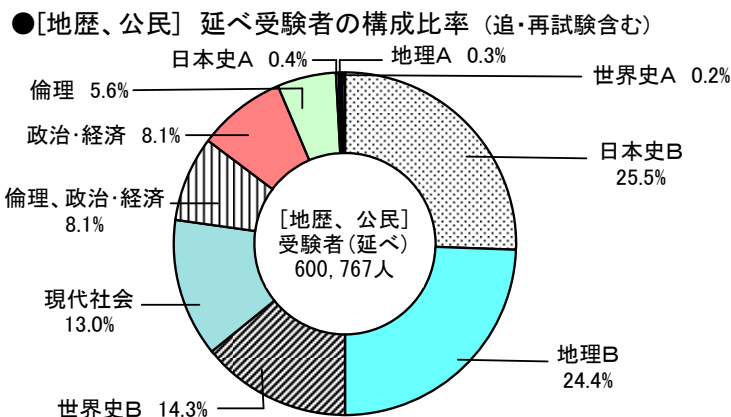
◎ **「第1解答科目」と「第2解答科目」**

24年セ試から従来の地歴、公民、及び理科3グループの試験枠を[地歴、公民]と[理科]にそれぞれ改変して各試験枠から最大2科目の選択・受験を可能とした。

志望大学のセ試利用が“1科目利用指定”である場合、当該受験生は“本命1科目”に絞って「2科目選択・受験」（2科目試験枠）を「事前登録」（24年から導入）し、“本命1科目”の解答に最大2倍近い解答時間(120分程)を掛けることが可能である。つまり、2科目

受験の場合の解答科目の順番は受験者に任されることから、2科目受験者は「第1解答科目」の解答時間(60分)を、「第2解答科目」(本命科目)の解答に充てることもできる。

こうした、解答時間の“不公平”を是正する観点から、全ての国立大と大半の公立大、及び一部のセ試利用私立大では、“2科目試験枠”における受験者が“1科目利用指定”の学部等に出願した場合、「高得点科目」による合否判定ではなく、「第1解答科目」の成績を合否判定に用いる。



□ [地歴、公民] “2科目受験” の状況

◎ 地歴と公民の2科目の実受験者数(追・再試験含む)は、25年より1万1,177人(前年比7.1%)減の14万5,640人である。2科目受験者の減少は、セ試受験者の減少に加え、理系志望者の“本命1科目”受験が増えたことなどによるとみられる。

試験枠[地歴、公民]の10科目(地歴A=3科目、地歴B=3科目、公民=4科目)から2科目を選択・受験する組合せは、全部で40通り(同一名称を含む組合せを除く)になる。

この40通りを地歴と公民の2教科の組合せで大別すると、次の3パターンになる。

(1) 「地歴」1科目 + 「公民」1科目受験：約12万6,000人、86.2%

「地歴」1科目と「公民」1科目の組合せによる2科目受験者(実受験者。以下、同)は、25年より9,773人(前年比7.2%)減の12万5,569人([地歴、公民]2科目受験者に対する割合86.2%)で、2科目受験者の9割近くを占める。このタイプの組合せは、24通りになる。このうち、「地歴B」と「公民」の受験が12万3,274人(同84.6%)で、圧倒的に多い。

科目別の組合せでは、日本史Bと現代社会の組合せが2万4,253人(同16.7%)、日本史Bと倫政経の組合せが1万5,583人(同10.7%)、日本史Bと政治・経済の組合せが1万4,141人(同9.7%)などとなっている。

① 「地歴B科目」 × 「公民」 受験：123,274人(84.6%)の内訳

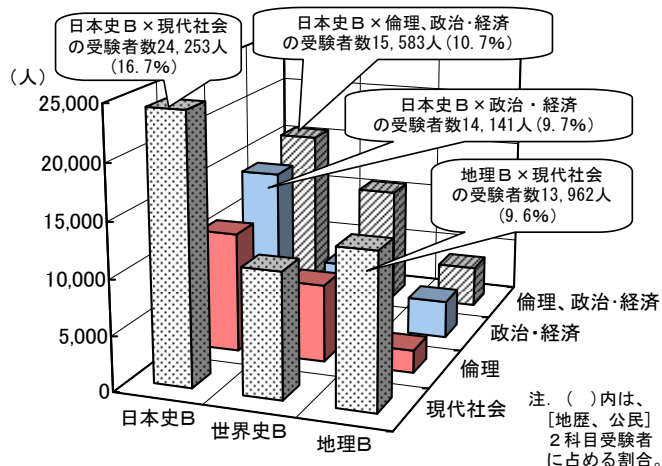
地歴	公民	公民			
		現代社会 (人)	倫理 (人)	政治・経済 (人)	倫理、 政治・経済(人)
地	日本史B	24,253 (16.7%)	10,979 (7.5%)	14,141 (9.7%)	15,583 (10.7%)
	世界史B	11,329 (7.8%)	7,101 (4.9%)	5,990 (4.1%)	10,679 (7.3%)
歴	地理B	13,962 (9.6%)	2,054 (1.4%)	3,414 (2.3%)	3,789 (2.6%)

② 「地歴A科目」 × 「公民」 受験：2,295人(1.6%)の内訳

地歴	公民	公民			
		現代社会 (人)	倫理 (人)	政治・経済 (人)	倫理、 政治・経済(人)
地	日本史A	556 (0.4%)	175 (0.1%)	303 (0.2%)	34 (0.0%)
	世界史A	322 (0.2%)	121 (0.1%)	113 (0.1%)	26 (0.0%)
歴	地理A	459 (0.3%)	70 (0.0%)	99 (0.1%)	17 (0.0%)

注。()内は、[地歴、公民]2科目受験者に占める割合。

●「地歴B」×「公民」受験者の内訳（追・再試験含む）



(2)「地歴」2科目受験：約1万7,000人、11.4%

地歴と公民の「試験枠」統合の要因にもなった「地歴」2科目受験については、受験者が25年より574人(前年比3.3%)減の1万6,646人([地歴、公民]2科目受験者に対する割合11.4%)である。

ただ、受験者数は減少したものの、2科目受験者に占める割合は0.4ポイント上昇した。また、「地歴B」科目同士の2科目受験者は、25年より480人(前年比2.9%)減の1万6,311人([地歴、公民]2科目受験者に対する割合11.2%)に減った。

「地歴」2科目受験による科目の組合せは、12通りになる。

科目別の組合せでは、日本史Bと世界史Bの組合せが6,990人([地歴、公民]2科目受験者に対する割合4.8%)、世界史Bと地理Bの組合せが6,414人(同4.4%)のほか、日本史Bと地理Bの組合せが2,907人(同2.0%)となっている。

①「地歴B科目」×「地歴B科目」受験：16,311人(11.2%)の内訳

地	地 歴	
	世界史B(人)	地理B(人)
歴	日本史B (4.8%)	2,907 (2.0%)
	世界史B —	6,414 (4.4%)

注：()内は、[地歴、公民]2科目受験者に占める割合。

②「地歴A科目」×「地歴A科目」受験：117人(0.1%)の内訳

地	地 歴	
	世界史A(人)	地理A(人)
歴	日本史A (0.0%)	57 (0.0%)
	世界史A —	38 (0.0%)

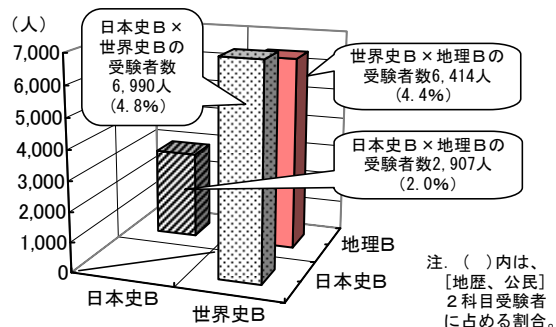
注：()内は、[地歴、公民]2科目受験者に占める割合。

③「地歴A・B科目」×「地歴A・B科目」受験：218人(0.1%)の内訳

地 歴	A・B科目	受験者(人)
日本史	A科目×世界史B	58(0.0%)
	B科目×世界史A	48(0.0%)
世界史	A科目×地理B	54(0.0%)
	B科目×地理A	23(0.0%)
地理	A科目×日本史B	20(0.0%)
	B科目×日本史A	15(0.0%)

注：()内は、[地歴、公民]2科目受験者に占める割合。

●「地歴B」2科目受験者の内訳（追・再試験含む）



注：()内は、[地歴、公民]2科目受験者に占める割合。

(3) 「公民」 2 科目受験：約 3,400 人、2.4%

「公民」 同士 2 科目の組合せは 4 通りで、受験者は 25 年より 830 人(前年比 19.5%)減の 3,425 人([地歴、公民] 2 科目受験者に対する割合 2.4%)である。

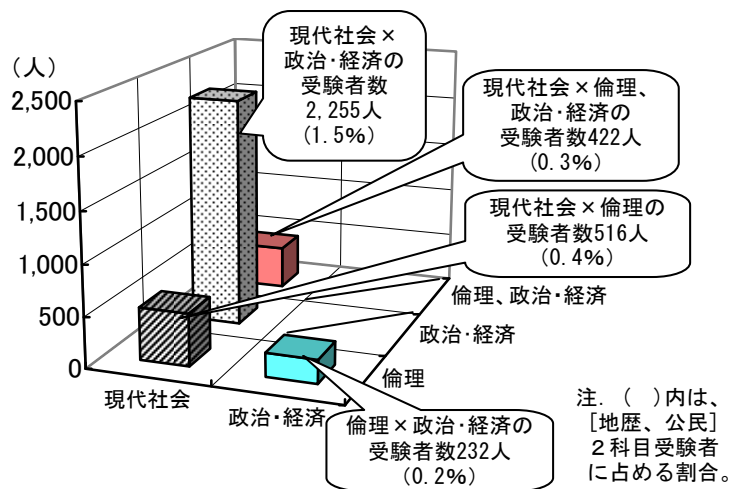
科目別の組合せでは、現代社会を基軸に、政治・経済との組合せが 2,255 人(同 1.5%)、倫理との組合せが 516 人(同 0.4%)、倫政経との組合せが 422 人(同 0.3%)などである。

● 「公民」 4 科目から 2 科目受験：3,425 人(2.4%)の内訳

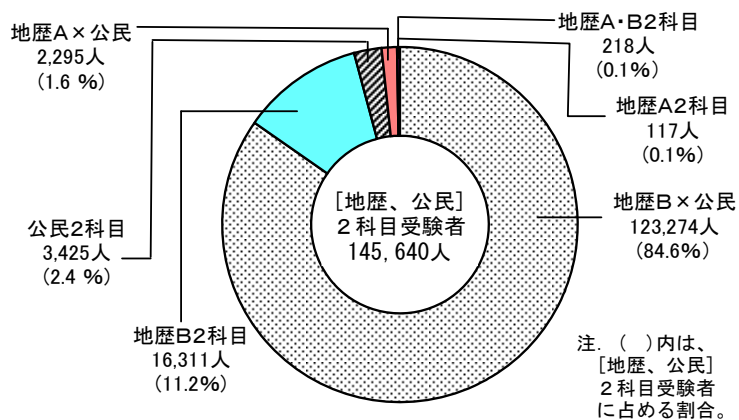
		公 民		
		倫理(人)	政治・経済(人)	倫理、政治・経済(人)
公 民	現代社会	516 (0.4%)	2,255 (1.5%)	422 (0.3%)
	政治・経済	232 (0.2%)	—	—

注。()内は、[地歴、公民] 2 科目受験者に占める割合。

● 「公民」 2 科目受験者の内訳 (追・再試験含む)



● [地歴、公民] 2 科目受験者の内訳 (追・再試験含む)



□ 「試験枠」統合等で、地歴・公民の2科目受験“大幅減”！

◎ 国公立大のセ試「5教科6科目」（地歴・公民から1科目）時代において、地歴と公民の「試験枠」が別々であった23年までの2科目受験では、高得点を期待する“公民保険”（地歴と公民の2科目受験の場合、高得点科目を可否判定に利用→公民の高得点を期待）の傾向が強く、9年～11年までは2科目受験者（実受験者。以下、同）が“激増”した。16年は、国立大の文系を中心に地歴・公民2科目必須となったため、2科目受験者は一気に増え、約25万3,000人の過去最多を記録。地歴・公民受験者に占める2科目受験者の割合（構成率）も初めて50%を超えた。

◎ 新課程（現行課程）入試となった18年は、時間割の変更等で2科目受験者は前年より約1万1,000人（4.9%）増の約24万4,800人。地歴・公民受験者に占める割合も過去最高の55.4%。

19～21年は、理系志望者を中心に“公民保険”の意味合いが薄れ、2科目受験者の減少、構成率の低下が続いた。22年は2科目受験者増となったが、その構成率は4年連続低下した。

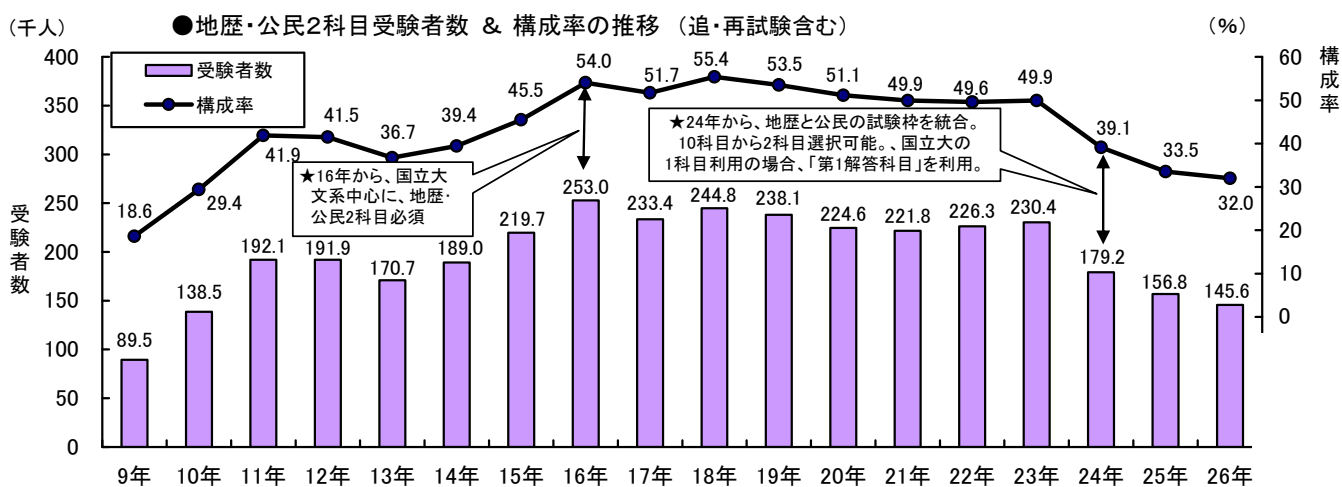
23年は2科目受験者が約4,200人（1.8%）増の約23万400人となり、2年連続の増加。また、2科目受験の構成率も49.9%で、5年ぶりのアップとなった。

◎ 24年は「試験枠」の統合、国立大を中心とした1科目指定における2科目受験の成績利用の大転換（「高得点科目」→「第1解答科目」）などから、“公民離れ”が進んだ。

その結果、統合された試験枠[地歴、公民]における2科目受験は、23年より5万1,207人（前年比22.2%）減の17万9,217人に“激減”した。また、地歴または公民の実受験者（1科目・2科目受験）に占める2科目受験者の割合（構成率）も39.1%にダウンした。

◎ 「試験枠」統合3年目の26年は、前述したように「第1解答科目」利用の定着などで理系志望者の“公民離れ”が一層進み、地歴と公民の2科目受験者は25年より1万1,177人（前年比7.1%）減の14万5,640人だった。

この受験者数は、「試験枠」統合前の23年に比べ、8万4,784人（36.8%）の“大幅減”で、2科目受験の構成率も23年より17.9ポイントダウンの32.0%に低下した。



注. 「構成率」は、地歴または公民の実受験者数（1科目・2科目受験）に占める、2科目受験者数の割合。

■理科;物理 I・化学 I の受験者やや増加。地学 I の平均点 50.2 点で、過去最低!

◎ 選択科目の弾力化と「試験枠」の統合

理科も科目選択の弾力化を図るため、24 年から 3 グループの試験枠を統合し、6 科目から最大 2 科目の選択を可能にした。統合された試験枠[理科]における 2 科目選択の組合せは、全部で 15 通りになる。「第 1・第 2 解答科目」の扱いは[地歴、公民]と同様である。

◎ 受験者の動向等

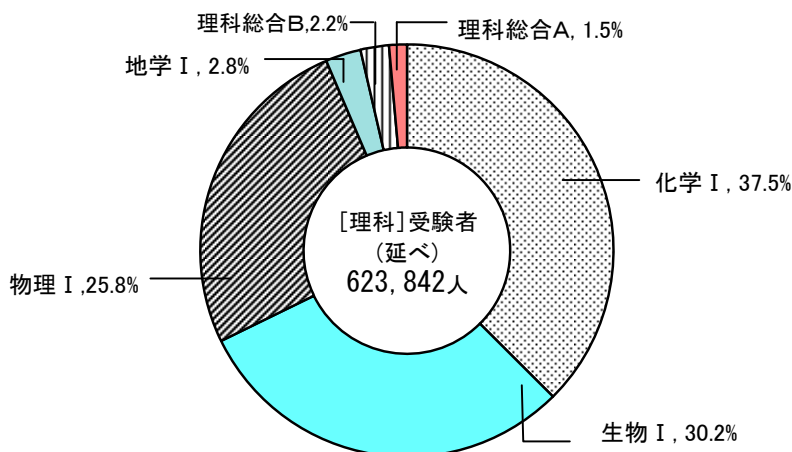
26 年の[理科]全体の実受験者数(追・再試験含む)は、25 年より 6,551 人(前年比 1.7%)減の 38 万 9,320 人であったが、“理系志向”を反映して、全受験者数(53 万 2,350 人)に対する「教科選択率」は 25 年より 0.2 ポイントアップの 73.1%であった。延べ受験者数は、25 年より 1 万 1,860 人(前年比 1.9%)減の 62 万 3,842 人だった。

理科の各科目(本試験)の受験者の動きをみると、物理 I は 1,179 人(前年比 0.7%)増の 16 万 823 人、化学 I は 1,687 人(同 0.7%)増の 23 万 3,632 人で、理工系に必須の物理 I・化学 I はともにやや増加した。

これに対し、文系志望者の受験が比較的多い生物 I は 7,415 人(前年比 3.8%)減の 18 万 8,400 人、地学 I は 185 人(同 1.0%)減の 1 万 7,668 人だった、また、理科総合 A(前年比 28.4%減)、理科総合 B(同 19.5%減)とも大幅に減少した。

平均点は、化学 I の+5.8 点(得点 69.4 点)、理科総合 A の+3.5 点(同 48.2 点)を除き、他の 4 科目はダウン。生物 I は-8.1 点(同 53.3 点)、物理 I は-1.1 点(同 61.6 点)。特に地学 I は-18.5 点(同 50.2 点)の大幅ダウンで 21 年の 51.9 点を下回り、共通 1 次試験を含め過去最低だった。

●[理科] 延べ受験者の構成比率 (追・再試験含む)

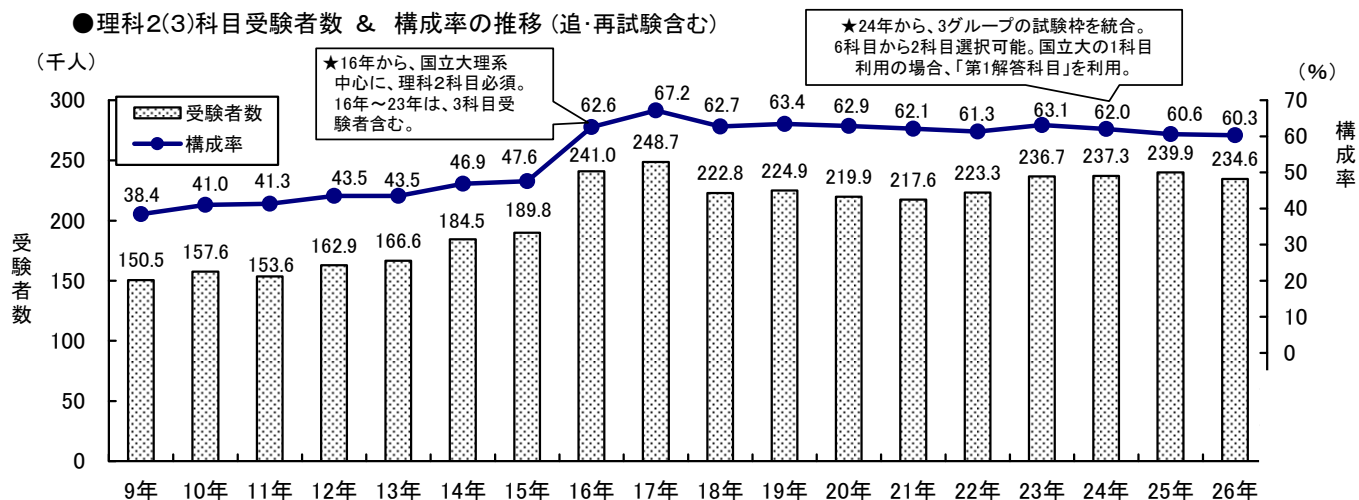


◎ [理科] “2 科目受験” の状況

試験枠[理科]における 2 科目の実受験者数(追・再試験含む)は、25 年より 5,302 人(前年比 2.2%)減の 23 万 4,577 人で、[理科]の実受験者数(追・再試験含む)38 万 9,265 人に対する割合(構成率)は 60.3%である。

2 科目受験の組合せは例年同様、物理 I と化学 I の組合せが 14 万 1,159 人(2 科目受験者に対する割合 60.2%)で最も多く、次いで化学 I と生物 I の組合せが 6 万 9,723 人(同 29.7%)で、化学 I を基軸に物理 I と生物 I との組合せが 2 科目受験全体の 9 割を占めている。

●理科2(3)科目受験者数 & 構成率の推移 (追・再試験含む)



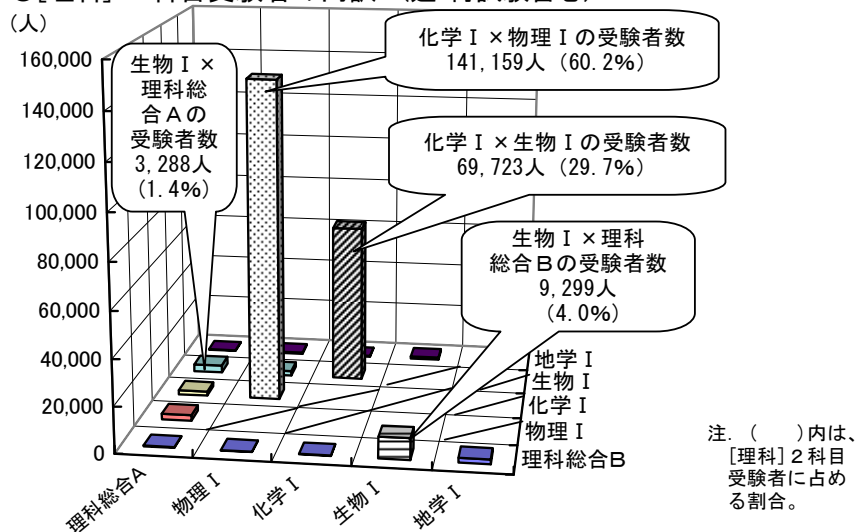
注. 「構成率」は、理科の実受験者数 (16年～23年は1科目・2科目・3科目受験者) に占める、2(3)科目受験者数の割合。

●[理科] 2科目受験者：234,577人の内訳

	理 科				
	理科総合B(人)	物理I(人)	化学I(人)	生物I(人)	地学I(人)
理科総合A	339 (0.1%)	2,426 (1.0%)	1,806 (0.8%)	3,288 (1.4%)	181 (0.1%)
理科総合B	—	116 (0.0%)	230 (0.1%)	9,299 (4.0%)	1,951 (0.8%)
物理I	—	—	141,159 (60.2%)	2,123 (0.9%)	588 (0.3%)
化学I	—	—	—	69,723 (29.7%)	381 (0.2%)
生物I	—	—	—	—	967 (0.4%)

注. ()内は、[理科] 2科目受験者に占める割合。

●[理科] 2科目受験者の内訳 (追・再試験含む)



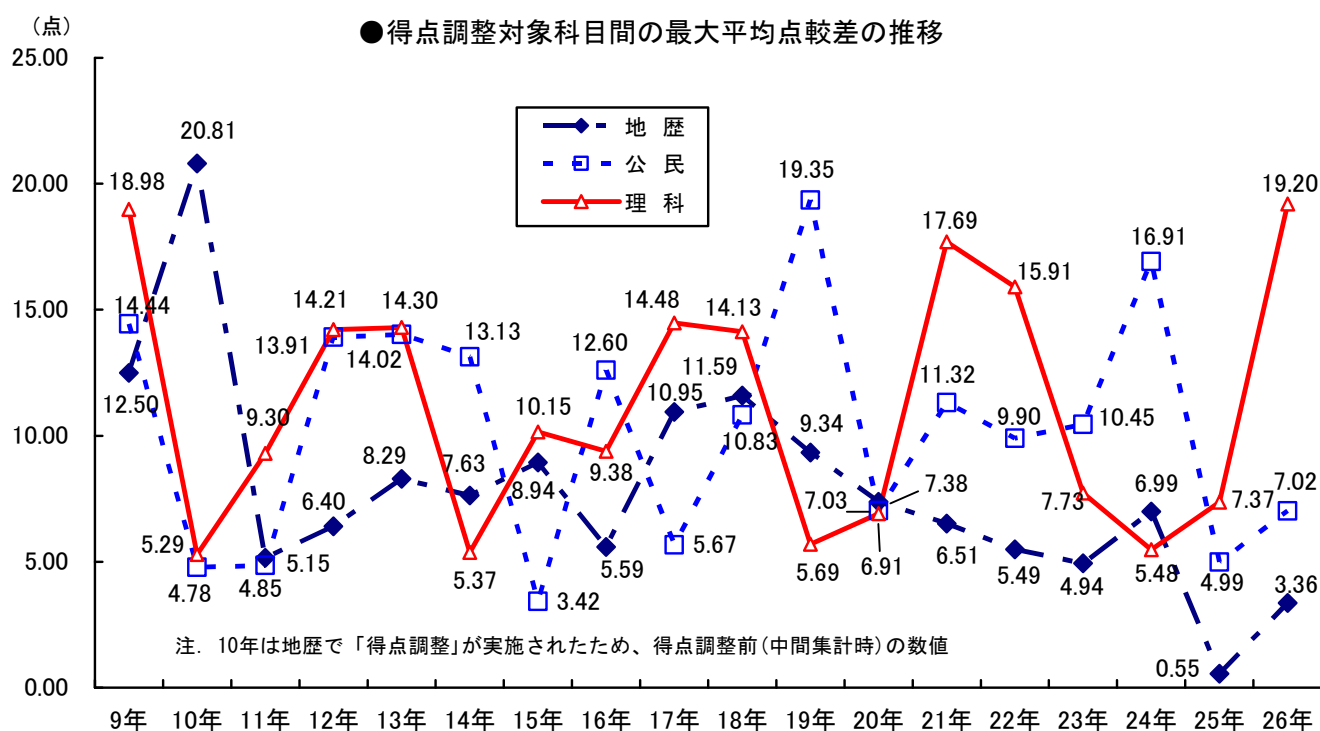
注. ()内は、[理科] 2科目受験者に占める割合。

■ **得点調整**; 対象科目間の平均点較差「化学Ⅰ－地学Ⅰ」=19.20 点で、調整なし！

◎ セ試の選択科目間における大幅な平均点差に対しては、「得点調整」が実施される場合がある。得点調整は、「地歴のB科目間、公民(倫政経を除く)の各科目間、及び理科の各<Ⅰ科目>間で、原則として20点以上の平均点差が生じ、これが試験問題の難易差に基づくものと認められる」と、実施される。

◎ 下図は9年以降の得点調整対象科目間の最大平均点差の推移を示したものである。

26年の得点調整対象科目間の平均点差をみると、**地歴**：地理B－日本史B=3.36点／**公民**：倫理－政治・経済=7.02点／**理科**：化学Ⅰ－地学Ⅰ=19.20点で、最大較差の理科でもガイドラインの20点以内に収まり、得点調整は実施されなかった。



<得点調整の実施>

- これまでの得点調整実施の有無をみると、10年は地理Bと日本史Bとの平均点差(地理B > 日本史B)が20点以上(中間集計時点)となったため、世界史Bも加えた地歴3科目間で得点調整が実施された。
- グラフにはないが、共通1次時代(前々回の教育課程による旧・旧課程入試)の平成元(1989)年にも理科で実施(物理・生物の得点を修正)された経緯がある。

注) 旧課程入試(9年～17年)の得点調整対象科目は、地歴と理科のB科目間、及び公民の各科目間。

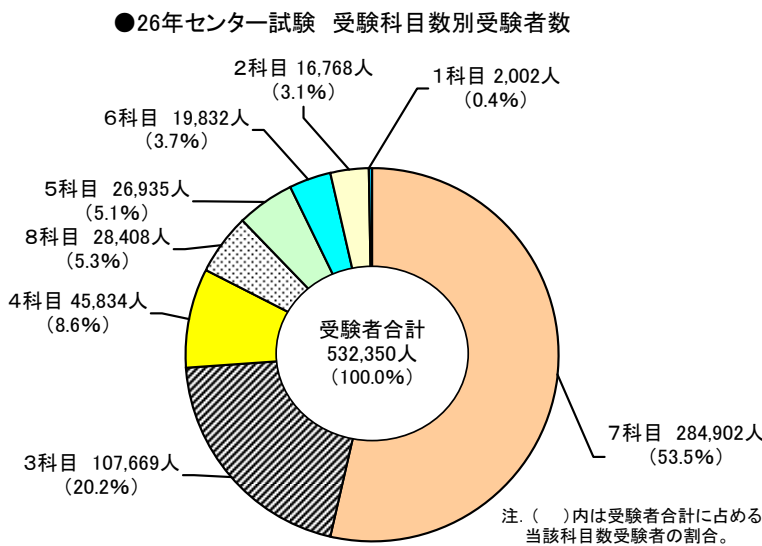
■ **受験科目数別の受験状況**; 7科目受験者“前年並み” / 8科目受験者“20.7%減”!

◎ セ試の受験科目数は、24年から理科の選択・受験科目数が最大3科目から2科目となったため、最大受験科目数は23年までの9科目から8科目に減っている。

◎ セ試の受験科目数別における受験状況の推移(下図)をみると、16年以降、国公立大の「5(6)教科7科目」化によって「7~9科目」受験が急増し、高い受験率(当該科目数の受験者数÷全受験者数×100)を示している。

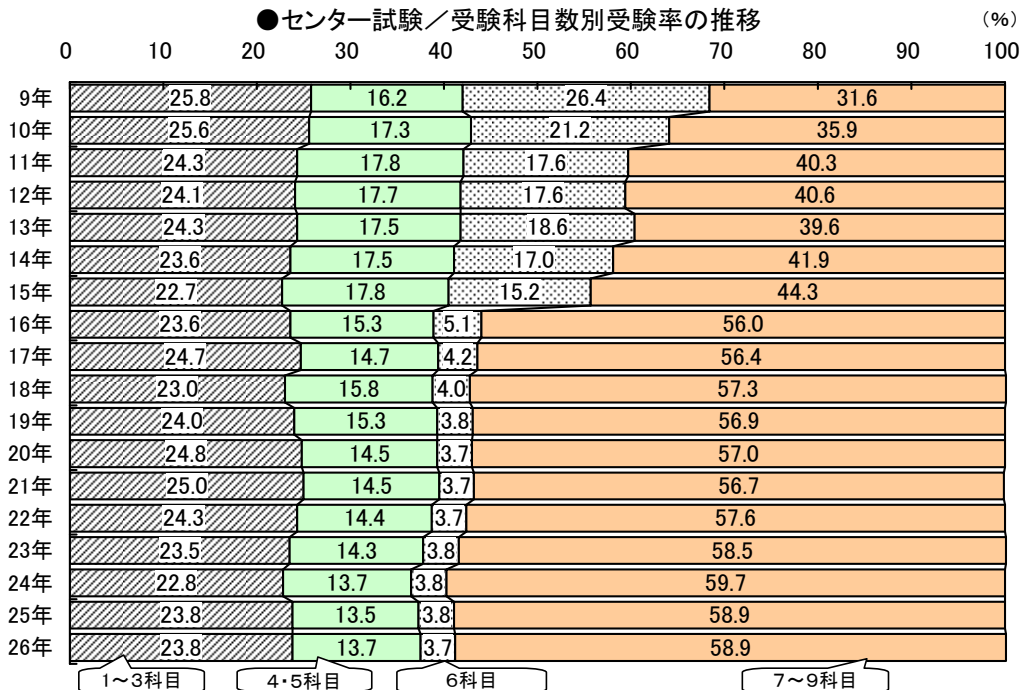
◎ 26年の最大受験科目数である8科目受験者は、全体の受験者(53万2,350人)が25年より1万921人(2.0%)減少した中、7,393人(前年比20.7%)減の2万8,408人だった。

ただ、7科目受験者(全受験者の53.5%)は25年より483人(同0.2%)増の28万4,902人で、全受験者に占める割合も1.1ポイント上昇した。



過去最高の「受験率」

◎ 全体の「受験率」(全受験者数÷志願者数×100)は19年以降上昇傾向にあり、26年は前年を0.20ポイント上回る94.95%で過去最高になった。
 なお、これまでの最高は、セ試開始時(平成2年)の94.85%。



注. ① 受験率は、受験者合計に占める当該科目数受験者の割合。
 ② 9科目受験可能は、16年~23年。 ③ 16年から国立大を中心に、5(6)教科7科目。